

### 北の文脈文学講座

午後 2 時～3 時 2 階ラウンジ

#### 「陸羯南と佐藤紅緑」

講師：舘田勝弘氏（陸羯南会会長）

令和 5 年 9 月 16 日（土）

佐藤紅緑は、俳人・劇作家・小説家として一世を風靡したが、当初は陸羯南を信奉し新聞記者を目指していた。舘田氏はその経緯を、紅緑の「陸羯南先生「銘肝私記」」（『日本及日本人』第 184 号・昭和 4 年 9 月）の本文をもとに解説した。紅緑は弘前での「不良少年」時代、新聞『日本』で羯南の論説を読んだ時の感激を次のように書いている。「先生が条約改正論を連載して大隈案を攻撃した文章は少年の私の胸をどれだけ強く打たか知れない」。紅緑は上京して羯南の玄関番となるが、羯南が言った「天下国家の経綸」という言葉を肝に銘じ、やがて日本新聞社に入社。そこで正岡子規と運命的な出会いをする。舘田氏はまた、『サンデー東奥』第 2 号（昭和 4 年 2 月 17 日）の記事により、紅緑ら弘前の若者による「覚眠社」結成（明治 20 年頃）における、「羯南先生崇拜の極—或は憧憬の極、特殊な気風を作り上げてみた」ことの影響を指摘した。



舘田勝弘氏

#### 「サトウハチローの詩とその時代」

講師：藤田晴央氏（詩人）

令和 5 年 10 月 21 日（土）

藤田氏は、サトウハチローの作品について、時代背景や生涯などを交えながら紹介した。「リンゴの唄」や「長崎の鐘」の作詞で知られるハチローは、「ちいさい秋みつけた」など、多くの人に愛された童謡詩人でもあった。〈学校で良く歌った〉〈NHK みんなのうたでよく聴いた〉耳になじんだ歌がハチローの詩であることが多い。また、ザ・フォーク・クルセダーズが歌った「悲しくてやりきれない」は私たちが普段快活に日常を過ごしているながら、誰もが〈悲しいもの〉を抱え懸命に生きていることをよく表現している。ハチローが活躍し始めた大正から昭和にかけて、さまざまな芸術が盛んになり、レコードの普及やラジオの出現により「歌」が国民全体に共有されるようになった時代であった。藤田氏はこれからもハチローの詩を読み、歌い継ぎ、「ちいさい秋」をみつめる心を大事にしたいと結んだ。

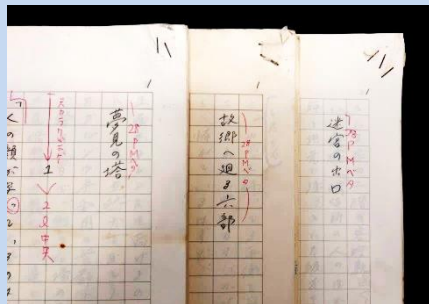


藤田晴央氏

### 次回スポット企画展「新収蔵資料展」

期間：令和 5 年 12 月 2 日～令和 6 年 2 月 29 日まで

弘前市出身の作家・長部日出雄（昭和 9 年生まれ）が平成 30 年 10 月 18 日に世を去ってから 5 年目の今年、御遺族から長部にかかわる多数の資料が寄贈されました。本展はその中から、自伝的連作『醒めて見る夢』、歴史小説『未完反語派』などの直筆原稿と愛用の品を中心に展示します。



原稿『醒めて見る夢』

### 郷土文学館レポート

#### ■開館記念 無料開館

期間：令和 5 年 6 月 30 日～7 月 2 日

開館日（平成 2 年 7 月 1 日）を記念した無料開館では、展示室内でのクイズラリー、歴代企画展スタンプ展、『少年倶楽部』の附録「ツバメグライダー」を作成するワークショップなど、文学館により親しんでいただけるよう催しました。また、弘前南高校のご協力のもと、南高生による「太宰治研究」を掲示いたしました。



南高生による「太宰治研究」

#### ■博物館実習

期間：令和 5 年 8 月 16 日～20 日

博物館実習を 5 名受け入れ、5 日間を通して郷土文学や文学館の業務に理解を深めました。最終日には一般の来館者にむけての展示解説に挑戦しました。

### お知らせ

#### ■ミニ企画 石坂洋次郎

（於 2 階 石坂洋次郎記念室）

期間：令和 5 年 10 月 1 日～令和 6 年 3 月 21 日

「石坂洋次郎の特装本」と題して、特別な装幀が施された書籍を紹介いたします。愛蔵版『わが日わが夢』（立風書房）表紙のこぎん刺し（工藤得子・作）、弘前市出身の洋画家、佐野ぬいによる挿画もご覧いただけます。また『海を見に行く』（成瀬書房）の表装（生澤朗肉筆画）も二種展示しております。



愛蔵版『わが日わが夢』表紙、背表紙

#### ■休館日

○年末年始休館

令和 5 年 12 月 29 日～令和 6 年 1 月 3 日

○展示替えのため休館

令和 6 年 3 月 22 日～3 月 31 日



第 47 回企画展 小説「花はくれない」－佐藤愛子が描いた父・紅緑－ 記念講演会 令和 5 年 8 月 19 日（土）弘前市立観光館 多目的ホール

### 「紅緑が愛したフランス作家たち」講師：小倉孝誠氏（慶應義塾大学教授）

記念講演会では講師に慶應義塾大学教授の小倉孝誠氏をお迎えし、佐藤紅緑に影響を与えたフランス 19 世紀の作家とその時代、そして「狂乱の歳月」と呼ばれた紅緑渡仏時のパリの状況などを解説していただきました。

#### —講演要旨（小倉氏記）—

佐藤紅緑は若い頃からフランス文学に強い関心をいだき、明治末期にはみずからユゴーやモーパッサンを翻訳した。彼は明治から昭和まで長きにわたって多彩な文筆活動を繰り広げたが、時期によって創作ジャンルの比重は推移した。彼は多くのフランス作家を評価し、愛読したが、彼自身の創作活動と作品のテーマによって、フランス作家への関心も変化したように思われる。

明治 30、40 年代、紅緑は「あん火」など、人間の秘められた情念をえぐり出す自然主義的な小説で注目された。そこには民衆の暗い欲望や、過酷な運命を語ったモーパッサンとの類似性が感じられる。佐藤愛子の「花はくれない」によれば、当時の紅緑はこの作家に深く傾倒していた。大正時代の紅緑は、「虎公」などの大衆小説を新聞に連載したが、それらの作品は波瀾万丈の筋立てのなかで、善と悪、正義と不正を対比させながら、読者に社会の理想を示そうとする。その点で、ユゴーやデュマの作品に見られる教育的な意図を共有している。さらに昭和初期、紅緑は「あゝ玉杯に花うけて」をはじめとする少年小説で一世を風靡した。その多くは、貧しいが誠実な少年が、勇気と行動によって成長を遂げていく物語である。フランスのジュール・ヴェルヌは、同時代の科学の進歩を背景にしながら、やはり少年が試練を経て成長していく姿を描いた。

昭和初期に書かれた評論文「小説家ゾラの熱血」において紅緑は、ドレフュス事件に際して政府と陸軍を弾劾したゾラの勇気を称賛している。フランス陸軍のユダヤ人将校ドレフュスが、ドイツ軍に軍事機密を漏らしたとして有罪になった事件である。これが冤罪だと確信したゾラは（実際、真犯人はほかにいた）、1898 年 1 月に「私は告発する！」と題された論考を新聞に発表し、これが事件の流れを大きく変えることになった。紅緑はゾラの知性と、高貴な論調を称えている。陸羯南の影響もあって、文学者もまた天下国家を語るべきだと考えた紅緑から見れば、ユゴー（国会議員も務めた）やゾラはまさに文学者の理想だっただろう。

紅緑が読み、愛したフランス作家の多くは 19 世紀（日本で言えば幕末から明治期）に活躍した。フランスの 19 世紀は、目まぐるしく変動した時代である。何度も政治体制が変わり、産業革命と資本主義の発達にともなって貧しい労働者階級が生まれた一方で、新聞・雑誌など活字メディアの発展と教育制度の整備によって、社会の民主化が進んだ。そうした時代を背景にして、たとえばユゴーは「レ・ミゼラブル」（1862）において、ジャン・ヴァルジャンの生涯をとおして社会がはらむさまざまな問題を物語化してみせた。ゾラの主著「ルーゴン＝マッカール叢書」（全 20 巻、1871-93）は、19 世紀後半のパリと地方を舞台にしてあらゆる階級の人々を登場させ、近代化の流れ、民衆の苦悩と歓び、資本主義のメカニズムをみごとに描いた。ユゴーとゾラは、現代フランスでも好まれ、高く評価される国民作家である。

自然主義的な小説、政治的、社会的な内容の濃い小説や戯曲、そして少年小説など、紅緑はさまざまなジャンルに手を染め、すぐれた作品を残した。いずれのジャンルにおいても、近代フランス文学と共通するテーマと精神が読み取れる。



会場の様子

#### 講師プロフィール

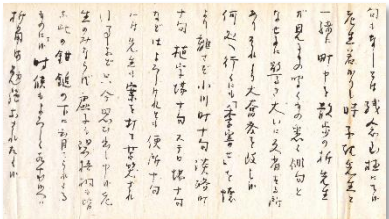
弘前高校卒業。東京大学博士課程中退、文学博士（パリ・ソルボンヌ大学）。現在、慶應義塾大学教授、日本フランス語フランス文学会会長。日本学術会議の前連携会員。近代フランスの文学と文化史を研究。主な著書として『歴史をどう語るか』（2021 年）、『世界文学へのいざない』（共著、2020 年）、『ゾラと近代フランス』（2017 年）、『写真家ナダール』（2016 年）、『愛の情景』（2011 年）など。翻訳書にコルバン編『感情の歴史』（監訳、全 3 巻、2020-2021 年）、ユルスナール『北の古文書』（2011 年）、バルザック『あら皮』（2000 年）など多数。

## 第 47 回企画展 「小説「花はくれない」 –佐藤愛子が描いた父・紅緑–」 展示替え

## 資料紹介

企画展「小説「花はくれない」–佐藤愛子が描いた父・紅緑–」は、10月1日からの展示替えで、初公開の資料を中心に新たな資料を展示しています。

1 佐藤紅緑最晩年の書簡 佐藤紅緑が正岡子規の従兄弟・正岡忠三郎に宛てた書簡など 19 通。うち 16 通は昭和 22 年の大晦日から紅緑死去の 24 年にかけてのもので、紅緑最晩年の書簡である。いずれも、紅緑の句集『花紅柳緑』第二輯の刊行にかかわる内容で、紅緑が死の直前まで俳句に傾けた情熱を伝えている。正岡忠三郎は、子規の叔父・加藤拓川の実子であるが、のちに子規の妹・律の養子となり正岡家を継いだ。司馬遼太郎の小説『ひとびとの足音』に登場する。(個人蔵)



正岡忠三郎宛 (昭和 23 年 5 月 12 日消印)

2 句稿ノート「花紅柳緑 続篇」 昭和 18 年から 23 年までの自作の句を季題別に自書したもので、紅緑最後の句稿ノートと思われる。昭和 18 年、紅緑は子規門下で俳句を始めた明治 27 年から昭和 17 年にかけての 4000 余句を収めた句集『花紅柳緑』を刊行。最晩年には、その第二輯刊行を目指していたが実現せず、句稿記載の句は遺句集『紅緑句集』(昭和 25 年)に収められた。終生深い絆で結ばれた、詩人・福士幸次郎への弔句「死といふは再び逢へぬ秋の事ぞ」(昭和 21 年秋)も、このノートに記されている。(サトウハチロー記念館蔵)



句稿ノート「花紅柳緑 続篇」

ほかに、紅緑の父・弥六が死去した大正 12 年に揮毫した書や、紅緑が監修を務めた俳誌『とくさ』(明治 40 年)なども新たに展示している。

第 47 回企画展 「小説「花はくれない」 –佐藤愛子が描いた父・紅緑–」 は令和 6 年 3 月 21 日まで

## 令和 5 年度 スポット企画展より

## 「マンガ陸羯南 原画展」

令和 5 年 7 月 24 日～9 月 22 日

今春、弘前市教育委員会から刊行された『マンガふるさとの偉人 陸羯南』には、羯南が生きた激動の時代とその生涯が生き生きと描かれている。作画を担当したのは、『津軽先輩の青森めじゃ飯』で知られる青森市在住のマンガ家・仁山溪太郎氏である。本展は、仁山氏の全面協力のもと、貴重な原画を中心に、マンガにも登場した羯南翻訳の『主権原論』や、富士登山のシーンで羯南が詠んだ漢詩“我且に仙盆の雪を飽喫し吐いて文章となして鬼人を驚かさんとす”が書かれた直筆原稿、その他色紙などを展示し、日本の言論界に大きな足跡を残した羯南の魅力を紹介したものである。

また、櫛引企画研究専門員による市内小・中学校での出張講座を実施し、マンガのシーンを取り上げながら羯南の生涯を分かりやすく解説した。弘前図書館では『マンガふるさとの偉人 陸羯南』の貸出、ロビー展示が行われた。



弘前市立郷土文学館

## 「生誕 120 年 サトウハチロー展」

令和 5 年 9 月 26 日～11 月 30 日

サトウハチロー(本名・佐藤八郎)は、明治 36 年、弘前市出身の小説家・佐藤紅緑の長男として東京都に生まれ、今年で生誕 120 年を迎えた。

大正 15 年 5 月、ハチローの処女詩集『爪色の雨』が刊行された。西條八十は「繊細で澄明な詩情」を、北原白秋は「雨の色を爪色と見た感覚のすばらしさ」を評価したが、父・紅緑は詩集を手にして「何だ、爪などというちっぽけなものを題にするとは!」と不満をもらしたという。

すぐれた童謡、歌謡曲などで一世を風靡したハチローだが、その原点は抒情詩にある。ハチローは、歌である前に「詩でなくてはならない」と考え、曲のリズムに踊らされない、質の高い詩を目指し続けた詩人である。

処女詩集『爪色の雨』  
金星堂 大正 15 年

爪色の雨の午前  
まつ毛のながいその女は  
ビユウテイ・スポットを  
入れては消し……  
消しては入れ……  
鏡は  
爪色の雨と泪に曇りぬ

## 寄稿

西茂森翰林街宗徳寺のご住職黒滝信行氏が、『佐藤紅緑 子規門の多彩人』(松山市立子規記念博物館編集 2004 年発行)という写真集を持ってきてくださった。たまたま子規の記念館へ行く機会があって、私のために購入してくれたのだという。早速ひもといて私の目にまず飛び込んできたのは、紅緑の兄弟姉妹 6 人が一緒に写真だった。全員が紋服姿で紅緑だけが居ないのは、父弥六の葬儀の時のものだと思う。紅緑は外務省囑託として映画研究のため外遊中だった。この写真は、私の父も当然持っていたはずなのだが、私はこれまで見たことがなかった。

写真の 6 人全員の背筋がしゃきっと伸びているのは、長兄が当時 61 歳、末っ子の私の父は 36 歳だったというから当然のことだが、女性 3 人の姿が何となく凛としていて、私の胸に響くものがあった。末っ子だった父の、私もまた末っ子だったこともあって、私と親交のあったのは父のすぐ上の伯母だけだったが、何気ない話の中に知性がちらっと顔を出して魅力的な伯母だった。上の 2 人の伯母たちも、同じような感じだったのではないかと、写真を見て思った。

この写真の 6 人の父親である弥六は、藩から選抜されて上京し、海軍術修業のかたわら福澤塾で英学を学んだ。中央で活動するつもりが兄が死去し、帰郷して兄嫁と結婚、異母兄妹 2 児の父親となって家督を継いだ。郷土に役立つような仕事もしたいらしいが収入とはつながらず、そんな中でも教育費を惜しまなかった。畑地から家屋敷まですべ

## 第 47 回企画展 特別ロビー展より

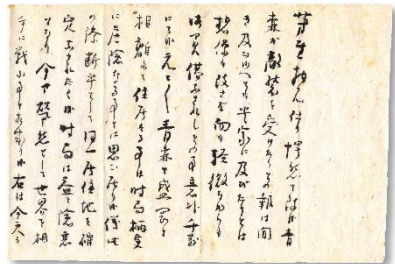
## 「戦中戦後の紅緑一弟・毅六に宛てた書簡より」

令和 5 年 7 月 29 日～8 月 15 日

文筆家・佐藤きむ氏の父は、佐藤紅緑の異母弟・毅六である。この度、紅緑が毅六(当時、盛岡市在住)に宛てた書簡を、きむ氏からご提供いただいた。

太平洋戦争終結の前年、昭和 19 年 4 月、紅緑は住み慣れた兵庫県甲子園五番町の自宅から、静岡県興津町清見寺一八三番地に疎開する。しかし、「富士山といふ目標のある土地とて空襲頻発」の危険から逃れるため、老妻・シナとの弘前(または青森)疎開の可否を異母弟の毅六に問い合わせる。毅六から、「弘前は食料欠乏、青森は家屋なく、盛岡地方に疎開するより他なき旨」を伝えられた紅緑は、「信州蓼科山麓に小さな家を借る事」を検討。結局、弘前疎開は実現しなかった。紅緑は 20 年 5 月、作家・真山青果の勧めで長野県蓼科高原へと移り住む。

昭和 20 年から 23 年までのこれらの書簡は、終戦前夜、終戦、そして戦後にかけての、紅緑の苦境や心境を伝える貴重な資料となっている。

佐藤紅緑書簡 佐藤毅六宛  
昭和 20 年 8 月(推定) 14 日

## 紅緑の兄弟姉妹たち

佐藤きむ(文筆家・佐藤紅緑姪)

て手放して、中学生の時に家を出て自力で生きた紅緑を除いて男女の差別なく子供たちを今の制度で言えば大学まで進学させた。ついに末っ子の私の父の時には資金ゼロ、25 歳年上の長兄が学費を出してくれたという。長兄には一人娘がいて、将来、自分の弟とはいうものの実際は従弟である私の父を、娘の婿にしたいという考えもあったらしいが、佐藤一族の DNA「荒ぶる血」が流れている二人だけに、年頃になったら両方が拒否したという。

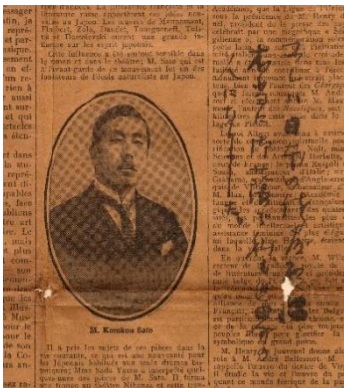
写真に話をもどす。弥六と兄嫁だった妻との間には紅緑を含めて 7 人の子供が生まれたが、4 人が夭逝して写真に写っているのは 2 人だけである。7 人めの子供が生まれて間もなく妻が他界。その後再婚して生まれたのが、私の父と 2 歳違いの姉である。その再婚した妻にも先立たれた弥六は、その後の死去するまでの 2 年間を、子供の中で 1 人だけ弘前市に住んでいる若くて未亡人となった下の娘の所で暮らした。生活費は、息子たち 3 人が、妹の家族も十分暮らせる金額を毎月届けたという。薄給の公務員だった私の父だけは仕送りを免除してもらって、時々顔を見せるのが、ただ一人県内に住む息子としての役割だったとか。4 種類もの異父異母の兄弟姉妹が荒ぶる血をたぎらせながらも、お互い争うこともなく、それぞれの人生を歩むことができたのは、日本古来の家族制度と福澤塾で学んだ新しい思想とを融合させた弥六の教育パパの力によるのだろうと、写真を見ながらいろいろと思いを馳せた。

## 「紅緑とフランス—偉大なる日本の作家、パリに—」

令和 5 年 8 月 16 日～8 月 31 日

1923(大正 12)年、紅緑は外務省の情報局囑託として、外国の映画研究の名目でヨーロッパ、アメリカを訪れた。ロビー展では紅緑を紹介する記事が掲載されたフランス・パリの新聞『コメディア』(サトウハチロー記念館蔵)や、企画展にて展示中の「日本帝国海外旅券」(同館蔵)の中身を紹介した。

新聞『コメディア』は文学、美術、舞台芸術、映画などのニュースを扱う新聞で、その中に海外の芸術と思想を報告するページがあった。ロビー展では記事を翻訳して全文を紹介した。「偉大なる日本の作家、パリに:佐藤紅緑氏」と題し、紅緑を当時の日本文学において自然主義創始者の一人としている。また紅緑がフランス文学愛好家であること、俳句の復興に貢献していることが記されていた。記事の横には紅緑の直筆で「コレハ日本の佐藤紅緑本当に御蔭で私も世界の人になりました」と書かれ、フランスの新聞に掲載されたことへの嬉しさと感動がうかがえる。



『コメディア』大正 12 年 5 月 1 日

弘前市立郷土文学館